

下顎骨舌側に発生した大きな周辺性骨腫の1例

虎谷 茂昭, 岡本 哲治, 高田 和彰

A case of large peripheral osteoma occurred on the lingual mandibular region

Shigeaki Toratani, Tetsuji Okamoto and Kazuaki Takada

(平成8年3月29日受付)

緒 言

骨腫は緩徐に発育する成熟骨からなる比較的稀な良性腫瘍で、骨膜下から発生する周辺性骨腫と骨の内部に発生する中心性骨腫、さらに軟組織に発生する傍骨性骨腫に分けられる。また組織学的には海綿骨から成る海綿状骨腫と層板骨質からなる緻密骨腫に分類される。今回われわれは右下顎舌側に有茎性に発育した鳩卵大の周辺性海綿状骨腫を経験したので報告する。

症 例

患 者：21歳 女性。

初 診：平成6年2月7日。

主 訴：右下顎舌側の腫瘤形成。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：初診約4年前より右口底部に腫瘤形成を自覚するも放置。腫瘤が徐々に増大し、知人に指摘されたため平成6年1月4日、某整形外科を受診し骨腫と診断され、紹介により当科を初診した。

現 症：

全身所見：体格、栄養ともに良好で、全身各部の骨格、その他に異常は認めなかった。

口腔外所見：顔貌は左右対象で、所属リンパ節に異常を認めなかった。

口腔内所見：6-2|舌側に鳩卵大の骨様硬の有茎性腫瘤を認めた。被覆粘膜はやや粗造で白色を呈していた。腫瘤の茎部は小白歯歯槽部で下顎骨に固着していた。歯牙の動揺、打診痛はなかった(写真1)。

血液・生化学検査：異常所見なし。

X線所見：パントモ、咬合法により6-2|舌側歯槽部に比較的境界明瞭なレントゲン不透過像を呈する

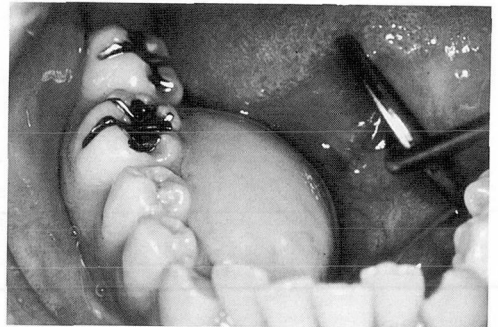


写真1 初診時口腔内所見

腫瘤を認めた。腫瘤の周囲は緻密骨様の像を示したが外周に一部針状を呈する部分が認められた。また腫瘤の内部は海綿骨状構造を呈していた(写真2)。CTにて腫瘤は咬合法と同様の所見を呈し、小白歯部の歯



写真2 初診時X線写真

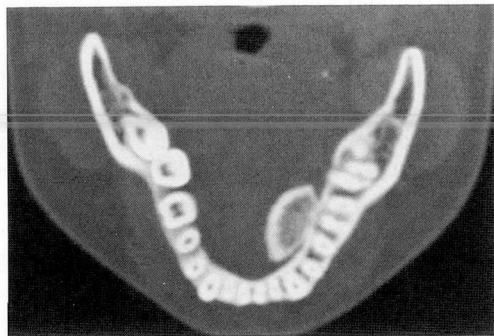


写真3 初診時 CT 写真

槽部付近で下顎骨と連続していた (写真3)。

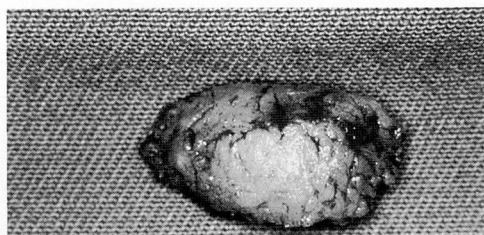
臨床診断：下顎骨周辺性骨腫。

処置と経過：1994年2月18日当科入院し、2月25日、NLA変法による全身麻酔下に腫瘍摘出術を施行した。6—2]相当の腫瘍茎部の舌側歯肉に粘膜骨膜切開を加えて剝離し、腫瘍を露出させた。粘膜剝離は容易で、被服粘膜はやや肥厚していた。腫瘍の茎部は1.5×1cmで小白歯部舌側の歯槽部から下顎骨に連続していた。腫瘍茎部を骨ノミにて切断し腫瘍を摘出した。骨バーを用いて切除部を平滑に整え、腫瘍を被っていた余剰の粘膜を切離し創部を閉じて手術を終了した。術後2年経過しているが再発なく良好である。

摘出物所見：腫瘍は2.8×1.7×1.5cm大の骨様硬で表面は粗造な緻密な骨組織からなっていた (写真4)。腫瘍茎部の断端面には海綿骨様の部分を認めた。

病理学的所見：摘出物の脱灰 H-E 染色標本の周辺部は少量の線維髄を含んだ緻密骨からなっていた。中央部では成熟した層板を持つ不規則な形態の骨梁が形成され、骨梁間是一部破骨細胞を伴った脂肪髄で構成された海綿骨組織からなっていた (写真5, 6)。

病理組織診断：海綿状骨腫



40 50 60 70 80

写真4 摘出物所見

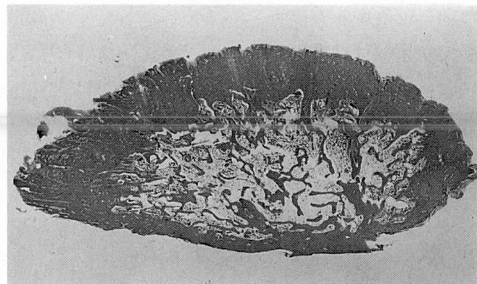


写真5 病理組織所見 弱拡大像



写真6 病理組織所見 強拡大像

考 察

骨腫は骨質の増殖から成る病変で、骨の内部に生じた中心性骨腫、骨膜性に生じた周辺性骨腫に分類される¹⁻⁴⁾。稀に骨から完全に遊離して軟組織に発生する傍骨性骨腫⁵⁾も報告されている。組織学的には増殖した骨組織からなり、成熟した層板骨質が形成されることが多いとされる。骨質に富み全体が緻密な緻密骨腫、骨質が比較的少なく海綿質様の構造を呈する海綿状骨腫 (梁状骨腫) に分類されている¹⁻⁴⁾。

顎骨に発生した骨腫で真の腫瘍と考えられるものは稀であるとの報告^{1,2)}があり、周辺性に発生した骨腫では完全骨化した骨軟骨腫、化骨性線維腫や外骨症さらに血腫の骨化などが鑑別診断の必要な疾患として挙げられている^{1,2,4)}。今回の症例は非腫瘍性の骨増殖を示す下顎隆起の好発部位に生じた骨腫であるため鑑別診断は困難と思われた。しかし下顎隆起は一般に左右対称性に発生し、単一または多発性の隆起を呈し、組織学的には緻密な層板骨の増殖からなり海綿骨状のものは少ない¹⁾。一方、骨腫は大きさが一般に非常に大きく、下顎骨の骨腫の付着形態は広基性の場合もあるが多くは有茎性であると言われている^{4,6)}。Stafne は⁶⁾ hyperostosis と骨腫の鑑別は大きさと臨床所見に基づくのが最良の鑑別方法と述べている。今回の症例は組

織学的には海綿状骨腫で、有茎性を呈した比較的大きい腫瘍が限局性に増殖していたため骨腫以外の疾患は想定しにくく周辺性海綿状骨腫と診断した。

骨腫は顎骨では上顎骨に比べて下顎骨に多く生じ^{2,7)}、下顎骨では臼歯部の頬舌側⁷⁻¹⁰⁾、下顎頭部¹¹⁾、下顎下縁¹²⁾に多く発生する。下顎骨の外方に発生したものは顔貌の変形⁴⁾のため比較的早期に摘出される。一方、内方に発生したものは構音障害や嚥下障害などの機能障害を生じる程度にまで増大して初めて医療機関を受診するため外方のものに比べて大きな骨腫の場合が多い。今回の症例も鳩卵大と比較的大きいものであったが、自覚症状はほとんどなく知人に指摘され当科を受診した。

好発年齢についてはどの年代にも発生するが青年層に多いとする報告^{3,6)}と40歳以上が多いとする報告^{1,2)}がある。今回の症例は既往歴から17歳頃には腫瘤の存在を自覚していた。若年者の場合は比較的発現年齢が予測できるが^{7,12)}、高齢者や自覚症状の全くない場合¹⁰⁾は骨腫の発育経過が非常に緩慢で無症状に推移するため³⁾、本腫瘍の発現年齢を決定することが困難である。

骨腫の治療は一般に比較簡単な摘出術が行われているが再発は稀とされている。今回の症例も摘出術を行って2年を経過しているが再発の徴候は認められない。しかし骨腫の発育は緩慢であるため再発に関しては長期の経過観察が必要であると考えられる。

結 語

今回われわれは21歳、女性の右側下顎舌側に生じた有茎性、鳩卵大の周辺性海綿状骨腫の1例を経験し、その概要と若干の文献的考察を行った。

文 献

- 1) 石川悟郎監修：口腔病理学Ⅱ．第2版，永末書店，京都，1982，553-555頁。
- 2) Gorlin R.J. and Goldman H.M.: Thoma's Oral Pathology. 6th Ed, Mosby Co. St Lous, 1970, p 560-562.
- 3) Shafer W.G., Hine M.K. and Levy B.M.: A Textbook of Oral Pathology, 4th Ed, WB Saunders Co., Philadelphia, 1983, p 163-164.
- 4) Thoma K.H.: Oral surgery. 5th Ed, Mosby Co. St Lous, 1969, p 964-975.
- 5) 松本光彦，松永心子，大木秀郎，下山哲夫，田中博，小宮山一夫：頬部に生じた骨腫の1例。日口外誌 40, 1091-1093, 1994.
- 6) Stafne E.C.: Oral Radiographic Diagnosis. 5th Ed. W.B. Saunders Co. Philadelphia, 1975, p 192-196.
- 7) 長田博，向井洋，牧角龍一，中村繁，新村淳一郎，山下佐英：下顎骨に発生した骨腫の1例。日口外誌 32, 959-962, 1986.
- 8) 中村堅一，松井隆，内山健志，黄国和，佐藤和則，酒井康友：辺縁性骨腫の2例。歯科学報 79, 1959-1964, 1979.
- 9) 田縁昭，上田正，児玉国昭，坂井満：下顎舌側に発生した骨腫の1例。日口外誌 21, 62-65, 1975.
- 10) 林誠一，川辺良一，藤田浄秀：下顎骨に発生した周辺性骨腫。日口外誌 37, 463-467, 1991.
- 11) 石橋利文，清水正嗣，石橋克禮，戸塚盛雄：顎関節突起部に発生した骨腫および骨軟骨腫。日科誌 33, 607-620, 1984.
- 12) 大岡俊夫，石川武憲，池本公亮，前田耕作，林綾子，原田直，深井直樹，下里常弘：下顎下縁に発生した周辺性骨腫の1例とその発生に関する考察。日口外誌 35, 2515-2519, 1989.